

第五高等学校と明治熊本大地震

村田由美 五高記念館客員准教授

平成28(2016)年4月14日午後9時26分、熊本は震度7の地震に見舞われた。さらに16日には14日をうわまわる地震に見舞われ、私たちは、「余震」ならぬ「前震」という言葉を知ることになった。この地震で、旧制第五高等学校(五高)の本館及び化学実験棟は倒壊こそ免れたものの大きな被害が出、修復を余儀なくされた。

この地震は、気象庁によって「平成28年熊本地震」と名付けられた。これは「直下型地震」と呼ばれるもので、平成23(2011)年3月11日午後2時46分に発生し、津波による大きな被害が報道された「東北地方太平洋沖地震」の「海溝型地震」と区別されている。五高が直下型地震に遭ったのは、今回が初めてではない。明治22(1889)年7月28日の「明治熊本地震」にも遭っている。これは、推定マグニチュード6.3の地震で、熊本では平成28年の地震が発生するまでは、地震観測が始まって以来最大の地震だった(1)。

『五高五十年史』(以下『五十年史』)によると、五高は明治19(1886)年に公布された「中学校令」をうけて、明治20(1887)年11月、第五高等中学校として古城町の仮校舎で誕生した。同年10月、新校舎の建設地を飽託郡黒髪村(現熊本市中央区黒髪の熊本大学黒髪北キャンパス)に決定し、翌21年2月に本館を起工し、22年8月に竣工となっている。地震は竣工直前の大事件だったのである。

『五十年史』には「二十二年七月二十八日午後十一時四十分につつた激震並に翌二十九日稍強二十三回軽震十四回、三十日稍強五回、軽震十回、三十一日稍強一回軽震十二回、八月一日稍強軽震六回と、当地未曾有の大地震に、民家の倒壊熊本市三十一戸半壊十七戸、飽田郡潰家百四十九戸半潰百七十四戸、その

外多数あり、熊本市圧死三人負傷五人、飽田郡圧死十五人負傷三十四人の外、人畜の死傷も少なからず」と記されている。しかし、五高には「些かの被害も無く、昭和11(1936)年に至るまで床板以外、取り換えられずそのままの姿であったという。『五十年史』では、基礎工事に「付近の白川には栗石が無くなつた」といわれるほど大量の栗石を使い「九尺に九尺を掘り下げ、夥しい程の栗石を入れて固めた」ことを、その要因と見ている。

日本では、地震観測は明治8(1875)年に始まり、明治17(1884)年には全国的に観測が開始された(2)。当時、熊本に測候所は開設されておらず、九州では明治21年に大分・鹿児島、明治22年6月に宮崎に地震計が設置され、「地震に対する関心が高まりつつあった直後にこの地震が発生したので、熊本地震は地震計による地震活動を議論できる最初の本格的な地震とすることができる(3)」という。ちなみに熊本に測候所ができ、気象観測が始まるのは明治23(1890)年2月である。

地震が起きたのは、明治22年7月28日午後11時49分のことであった。県は翌29日午前4時40分に内務省に電報を発信し、29日には官報の号外がでた。「熊本市街大地震電報」の題で、「昨二十八日午後十一時四十九分大地震市街所々地裂ケ潰家死傷等アリ鳴動尚ホ輟マス」と報じられた。「熊本新聞」発行者の水島貫之はこの日から8月31日までの日記と、日記では触れ得なかった新聞記事の抜粋と地震調査のために熊本に來た学者の学術的な報告資料とをまとめて『熊本明治震災日記』(4)として出版し、当時の様子を詳細に伝えている。

地震は、西の方に「轟然たる響き」を聞いたと思ううちに家が震動を始めたという。水島は家族を呼び、雨戸を

開けようとしたが開かず、数分後にやや震動が収まったときに雨戸を開け庭に座り込む。そのとき庭の池の水が北方にほとぼしり出ていたこと、揺れが縦揺れであったことを冷静に書き記している。やがて遠くから子を呼ぶ親の声や、親を呼ぶ子の声が聞こえてきた。度重なる震動で家の中に入ることを恐れ、地面に蓆や畳を敷いて夜を明かす人々が燈火や洋燈、提灯などを戸外に掲げたため、空を望むとまるで「火災かと怪しまるゝばかりの光景」だったという。水島は、自身の「熊本新聞」だけでなく、「九州日日新聞」や「海西日報」「独立新聞」の記事についても記載し、震災の様子を伝えている。

30日の官報では「地震被害続報」として、「昨夜二十八日来熊本県下ニ於テ地震ノタメ被リタル損害ノ景況ハ只今マテ取調ヘタル処ニテ熊本市ハ潰家二十二戸、半潰十六戸、橋梁破損七箇所、圧死三人、負傷六人、飽田郡ハ潰家三十二戸、圧死十五人、負傷十三人、県庁監獄ハ塀壁ノ破損ノミニテ囚徒ハ平穩ナルモ工役場破損ノタメ一時休役セリ三池出張所八代監獄ハ無事ノ報アリ其他民屋及道路ノ損所少カラス今ニ時々小震動アリ阿蘇山ハ異常ナキ模様只今取調中ナリ」とある。しかし、被害はさらに広がる。

12月16日の「官報」では、「熊本市外五郡ニ於テハ(中略)家屋ノ潰レタルモノ合計二百戸、半潰家同二百戸」となっており、その内訳の表が掲載され、熊本市の潰家31、半潰家17、飽託郡の潰家149、半潰家174と記されている。これは明治22年の『中央気象台・地震報告』⁽⁵⁾の数字と一致しており、前述の『五十年史』も、この記述に従っているようだ。

今村明恒の「九州地震帯」⁽⁶⁾にも被害状況が掲載されているが、熊本県下の被害は中央気象台の報告書より増え、全潰239、半潰236、圧死20人、負傷54人、裂地893、橋梁の壊落24、破損41となっている。その中に「第五高等学校 異常ナシ」という記述があるのが注目される。余震は12月31日までに566回と記されている。

この地震当時の記録が残っていないか、五高資料を調べたところ、『自二十年至二十二年 雑件』にいくつか興味深い資料が残っていたので紹介する。

まず地震が起きたあと文部大臣宛の電報文案で、7月29日に送達されたことがわかる。

①「明治二十二年七月二十九日

庶務掛

七月二十九日送達済 午前九時五十五分

大臣へ地震ノ件御報告電報案

昨夜十一時過ぎ熊本大地震市中破裂セシ箇所アリ
新築校無事

年月日

校長」

さらに当時の校長野村彦四郎が文部大臣に送付した報告書がある。

②「地震ノ大況文部大臣へ御届ニ及ビ候処其後ノ様子懸へ御参向相成不取敢電報ヲ以テ答申仕致候得共委細盡サズ依テ書面ニテ申上候初度ハ大震ハ二十八日ノ十一時四十分頃ニ有之家傾キ地破レ市中三年坂新橋ト申辺ハ亀列ヲナシ出町建町通り町辺ニハ倒シ家モ有之為メニ生命ヲ失ヒシ人モ有之又夕安楽警部長ノ飼馬ハ驚愕ノ末竟ニ死シ(原因不分明)陸軍理事山本某ノ飼馬モ殆ンド死ニ至ラントセリ午後市中ハ大率街上ニ路臥致シ予防ヲ第一ト致シ候様ニ見受候熊本城東南ニ向ヒタル百間石垣崩レ又下馬橋ノ上ノ石垣モ崩レ随分大ヒナル震動ト覚候得共幸ヒニシテ新築校ハ敷地内ニ破レモ之無候煉瓦ノ破レタルモ無之少々漆灰ニ破ヲ生ジタル辺ニ有之候当建掛ノ詳報モ可有之候只今近時ノ地動ヲ生ジ人心安ンゼズ候得共此上ハ格別ノ事モアルマジト皆申居候其原ハ未詳候得共俗ニ西山ト申シテ金峰山ト云フ高嶺(独立山)アリ二十日頃ヨリ鳴動スルト頻リニ坊間ニ流伝アリ今度ノ中点ハ多分此山ナラント十中ノ九迄ハ公評ニ御座候此山ハ阿蘇山ト島原温泉ガ嶽トノ線ニ当リ候由ニ御座候此辺ハ地理学者ノ考定ニアラサレバ委曲申上兼候先ハ右大略申上度如此ニ御座候乍憚大臣公閣下へモ此旨御届ヲ以テ御言上至被下度奉奏上候当校在勤ノ諸士皆無異壯康ニ御座候御安心被下度恐惶謹言

在熊本

二十二年七月三十一日 野村彦四郎

辻文部次官殿」

この文書から、五高は敷地内の地割れやレンガの破損もなく、漆喰が少々破損したくらいだったことがわかる。文書中に「金峰山」が「二十日頃ヨリ鳴動スルト頻リニ坊間ニ流伝アリ」とあるのは、水島の日記に詳述されているが、巷では金峰山が爆発するのではないかと噂が流れたことをさす。水島によると29日の午後には噂が

蔓延し、家財をまとめて荷造りをしたり、家族総出でよその土地に逃げたりする者が増え、著名な商店が荷物を運び出し店頭には品物が無い、などの騒ぎが伝えられると、人々の動揺が増幅していったという。新聞紙上では、こうした噂の否定に追われるが噂はいつこうに収まる気配がない。余震が続く中、8月3日午前2時15分、再び激震が襲うと、市街の風景は一変し、まるで戦乱時のように市民が逃げ出していく様子が日記には記されている。水島は「市外への出口出口は猶車響履聲の夥多きを覚ゆるのミ」と記している。

このときの県庁から五高への問い合わせの電報の文面③と、それに対する返事の文章案④が残っており、翌日4日に送達されたことがわかる。

③ 第一部第四号

地震景況取調上入用ニ付貴校損所及御校内地面震裂等之有無乍御手数至急御取調預御差廻度此段及御照会候也

明治二十二年八月三日 熊本県

④ 明治二十二年八月四日

発議者三浦御酒蔵

建築掛

八月四日送達済

本県庁へ震災之件左案以テ回答相成可致哉案

昨三日付ヲ以テ震災之件御問合之趣承知致候当新築校舎及ビ敷地内ニ於テハ別ニ異状無之候条此段及御回答候也

第五高等学校 御中

3日の地震は震度5程度だったと推定されている(7)。8月1日夜、いち早く熊本地震の調査にやってきた理科大学教授小藤文次郎は、3日のこの地震に遭遇するや、早朝からから金峰山の調査に出かけ、午後5時には、「西山(金峰山)破裂の恐れなからん」と報告をした。これを受けて「熊本新聞」では赤インクでその記事を印刷し、町のあちこちに貼り出した。しかし、いったん動揺して動き出した人々の足はなかなか止まらなかった。翌朝各新聞社が、小藤博士の報告を記事にし、さらにそれを街角に貼り出すにいたってようやく、人々の混乱も収まったという。しかし、騒動はこれで収まらなかった。県が人々の心を鎮静化させようとした「臨時第三報告」で「二の嶽最寄少しく怪しむべきの形跡あり尤も今俄に破裂するの見込にはあらざるも終に破裂せざるを保し難

し」との部分に反応した人々は、再び避難する者たちで大混雑となったのである。

水島は、「風声鶴唳」のたとえを出して、人々の恐怖心が、冷静に文章を読み解く余裕を失ったとみている。県はさらに5日「臨時第四報告」を公布しそこで小藤からの報告を原文のまま「当今の地下不穩は西山山彙の西北部に存するがごとく想像す然れ共其不穩たる単に鳴動小震に止り大事に及ぶべき徴兆を見ず」と小藤文次郎の記名入りで新聞に掲載し、次第に人心が平生に戻ったという。

水島は、この一連の「虚言騒動」について、民衆自身が恐懼のあまり、「百出停止しがたき浮説流言」の為に、惑わされてこの騒動を起こしたといえるのではないかと、慚愧の思いを述べている。また、このような根も葉もないうわさに惑わされたことを取るに足りないこととして書かずにおくことは、今回の「騒擾」を描写する上で「花を描いて幹を付せざるかごとき」ものとなるので、あらゆる噂による騒動を書き記したのだと、述べている。大災害時のこうした「流言」は、すでに私たちが今次の震災で体験したことである。

はからずも、今回五高資料中に明治22年の地震に関する資料を見つけ、「明治熊本地震」における五高を記録することとした。なお、五高資料の判読のため、同記念館の薄田千穂氏の助力を得たことを感謝したい。

注

- (1) 秋吉卓・淵田邦彦「熊本地震(1889)について」(『土木史研究』第18号、1999・8・5)
- (2) 国土交通省 気象庁ホームページ「気象庁の歴史」による
- (3) 注(1)に同じ
- (4) 明治22年10月、活版舎発行。国会図書館デジタルコレクションを閲覧した。
- (5) 「顕著地震摘要」(『中央気象台・地震報告』p26-39)に熊本地震についての記述があり、全潰200、半潰200、死20、負傷74、落橋19、橋梁毀損21となっている。
- (6) 今村明恒「九州地震帯」(『震災予防調査会報告』第92集、大9・12、p1-17)
- (7) 注(1)に同じ。